

かずさの博物誌

チュウサギ(中鷺)

～みの毛が美しいシラサギ～

文・写真 / 成田篤彦

2011.6.21



©成田篤彦

▲鷺山へ向かって飛ぶチュウサギ
繁殖期は眼先が黄色でくちばしが黒い。
2011年6月7日＝袖ヶ浦市 筆者撮影

三年前の五月晴れの日に、ここ三十数年通っている水田を訪れた。二十〜三十cmほど生育した稲株の間でチュウサギがえさをあさっていた。頭を右や左に傾け、眼を見開き、

一歩、一歩、そっと歩いていった。するとくちばしを素早く水面に差し込み、アメリカザリガニを捕え、頭から呑み込んだ。数匹のザリガニをとらえたところで、畦道に上がり、羽を丁寧にくちばしですき、綿毛を風に飛ばしていた。

胸と背にある純白の飾り羽が薫風になびき、美しい風情である。飾り羽は透かし模様で編んだレースに似ているが、それよりもはるかに上品で奇麗だ。

ちなみに、飾り羽は彼らが繁殖期になるともつようになる。これがみの(藁:カヤやスゲなどの茎で編んだ雨具)がたれているようにみえるので「みの毛」と呼ばれている。雌雄が向かい合ってこれをファーと広げる求愛のポーズの美しさはとても優雅である。また、十九世紀末、欧

米でこの毛を貴婦人の装身具に使うのがはやり、そのために多くのシラサギ(白い鷺の総称)の乱獲が行われた。

チュウサギはアフリカ、アジア、オーストラリアの温帯や熱帯に棲み、上総には春に訪れ、四月〜九月まで繁殖し、十月には南方に帰る。

彼らは他のシラサギ類のダイサギやコサギと違って、広い水田地帯では見られるが、狭い谷津田や川や干潟ではほとんど見ることがない。だが、稲刈り後の田んぼでトラクターが耕す後を追い、出てくるバツタなどを食べるのを見ることがある。

さて、チュウサギは県の重要保護生物に指定されていて、シラサギ類では最も絶滅が危ぶまれている。

そのわけは彼らが主に水田などの湿地でえさをとる。現在、それが、減少し続けているので、その影響を最も受けるからだと思像している。

ところで、先日、鷺山を訪れた。ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギ、アマサギ、ゴイサギが次から次へと飛んできて鷺山に入り、再び、飛び立っていく。



©成田篤彦

▲チュウサギ コウノトリ目 サギ科

体長約65〜72cm、夏鳥

2008年5月3日＝木更津市 筆者撮影

しかし、以前よりも訪れるサギ類が少ない感じがした。だが、それらのサギ類のなかでは最も多く飛来してきたのがチュウサギであった。外からほとんど彼らの巣が見えなかったが、

ユウサギが暗い林の中の巣の上にいるのが、葉の間から見えた。親がくちばしを開くとヒナがその間にくちばしを差し込みえさをもらっていた。ヒナは三羽いた。

話が外れるが、鷺山は埋立地の樹林帯にある。樹林帯の造成当時、この林の昆虫などを調査したので覚えていたが、樹林帯の境界の位置のみに植林し、中央は埋め立てた砂が風で飛ばないように藁(わら)を敷き詰めてあって、樹木は植えていなかった。鳥たちが持ち込む種子や風で飛んできた種子で林を造っていくのがねらいであった。そのため中央部が低い林である。そこに巣が造られているので、外からは見えにくく、彼らにとっては安全なのかもしれない。

鷺山の周辺はゴウ、ゴウ、ゴジョ、ゴジョ、チャ、チャと言う鳴き声でも騒々しいし、魚の腐ったにおいで満ちていた。また、彼らは飛んでいる最中に糞を落とすから、洗濯物などを汚して人々の生活に被害を及ぼす。

上総でもチュウサギなどと人々の暮らしとに摩擦が少ないようにして、共に棲んでいきたいものである。



©成田篤彦

▲ひなを育てるチュウサギ

2011年6月7日＝袖ヶ浦市 筆者撮影



©成田篤彦

▲飛び出す虫を追うチュウサギ

2007年10月14日＝木更津市 筆者撮影

〈主な参考文献〉北川捷康「九七六「コサギ」静岡県の自然四季の野鳥